

2018年1月13日

中西晶子

James Joyce, *Dubliners*における、 20世紀初頭ダブリンの社会的「麻痺」

<発表の構成>

- 1 作品について
- 2 卒論の主張
- 3 卒論の内容
- 4 まとめ

1 作品について

『ダブリナーズ』

ジェイムズ・ジョイス初期の作品。1914年に出版。アイルランドのダブリンを舞台に、ダブリンの市民階層の生活を描いた作品。全15編から構成される短編集。

2 卒論の主張

James Joyceが述べていた、*Dubliners*執筆の意図

My intention was to write a chapter of the moral history of my country and I chose Dublin for the scene because that city seemed to me the centre of *paralysis*. I have tried to present it to the indifferent public under four of its aspects: childhood, adolescence, maturity and public life. (Margot ix; italics mine)

→ジョイスは、ダブリンは「麻痺」(“paralysis”)を引き起こしていたと考えていた。その「麻痺」を表現するために、アイルランドの道德史を*Dubliners*に描いたということ。

◎「麻痺」という言葉について

ジョイスが創作を始めたのと同時代に発刊されていたアイルランドの雑誌『ダーナ』(Dana)において、ジョージ・ラッセル(アイルランドの文芸復興で活躍した人)が「麻痺」や「無気力」、「不活性」という言葉を用いた意見を書いている。これらの表現は、アイルランドの人々が抑圧され何事にも自発的に行動しない・できなくなったということを伝えている。ジョイスは『ダーナ』の雑誌関係者と関わりがあり、このジョージ・ラッセルとも交流があったとされている。そのため、この時

代の文芸に携わる者達が述べていたアイルランドの消極的な社会風土を、ジョイスも知っていて共感していた。(金井47)

「麻痺」という言葉が、当時の社会の人々の消極的な状態を指していたことは、以上の事実から読み取れる。

ジョイスは個人が麻痺しているのではなく、社会が麻痺状態であったことを示したいため、社会の仕組みや思想に目を向ける。作品の中で色濃く表現される社会の仕組みや思想は、階級・宗教・家庭環境の三つであると考え、これらの観点から物語に表現される「麻痺」を具体的に明らかにした。

3 卒論の構成と内容

▷卒論の構成

1 はじめに

2 “Two Gallants”から読み解く、20世紀ダブリンの階級における「麻痺」

3 “The Sisters”における、信者と聖職者の「麻痺」

4 *Dubliners*に描かれる家庭環境と、登場人物たちの「麻痺」

5 終わりに

<“Two Gallants”から読み解く、20世紀ダブリンの階級における「麻痺」>

▷“Two Gallants”について

競馬好きで周囲の人々に金銭を借りて生活しているレネハンと、警察官の息子であるコーリーが登場する。コーリーが付き合っている女中について、二人が話をしている場面から物語は始まる。二人はこの女中に対して何かを仕掛ける企みを計画しコーリーがその企みを実行することになる。コーリーが計画を実行している間には、レネハンが女性についてなどの考えを巡らせたり、遠目でコーリーの行動を見守ったりする。物語の最後まで、二人が何を目的にどんな企みをしていたかは明らかにされないのだが、女中から金貨を受け取ることができたというシーンで物語は終わる。

▷“Two Gallants”で表現される「麻痺」

主人公のレネハンが階級によって決められた自分の立場を認識し、今以上に職業や生活を変えようとならない点。

→裕福な家庭で育ったコーリーと比較して、身分の低い家庭で生まれたレネハンの様子

→自分で仕事を見つけるのではなく、お金持ちの女性と結婚したいというレネハンの願望

背景

- ① 20世紀初頭のアイルランドの階級制度
- ② 作者ジョイスの経験

< “The Sisters”における、信者と聖職者の「麻痺」 >

▷ “The Sisters”について

主人公の少年が、フリンという司祭と親しくしていたとわかる内容から始まる。しかしある日少年は、叔父と叔母、そしてCotterというお年寄りから、司祭が亡くなったという知らせを耳にする。訃報を知った少年は司祭の家に向かい、そこで司祭の姉妹に出会う。司祭が亡くなった前後の行動や、要因を聞いても、少年が司祭の死を悲しむ様子は見られない。司祭の姉妹の会話を聞き、司祭は亡くなるまでに精神的な負担を感じており、それが様々な行動にも現れていたということを知る。姉妹が司祭の死ぬ間際の行動を語る場面で、物語は終わる。

▷ “The Sisters”で表現される「麻痺」

少年の「麻痺」：親しくしていたフリン司祭が亡くなってしまったにも関わらず、感情が揺れ動くことはない。少年の、この親しい人物の死に対する無関心な状態を指す。

聖職者たちの「麻痺」：フリン司祭は、精神的にも肉体的にも生命力を失っていたということが、司祭の死後に司祭の姉妹たちによって語られる。この司祭の疲弊した状態を、「麻痺」としてジョイスは表現している。

背景

- ① カトリックを信仰しているものの、教会組織や司祭への反感を持っていたジョイス
- ② 発展した哲学・歴史学の学者たちによるカトリックの解釈への批判によって、立場が弱くなっていた聖職者たち

< *Dubliners*に描かれる家庭環境と、登場人物たちの「麻痺」 >

▷ 三つの物語のあらすじ

“Eveline”

19歳の少女エヴリンが、若い男性と恋に落ち、男性の誘いによって駆け落ちを試みる。少女の家庭は、母親が亡くなった後父親が暴力を振っているようなものであつ

た。しかしその中でも母のことや楽しかった時の家族を思い出して、駆け落ちの気持ちは揺らぎ、最終的にエヴリンは出発の港で立ち止まってしまう。

“The Boarding House”

下宿屋を営むムーニー夫人にはポリーという娘がいる。夫人は娘に自由な恋愛をさせていたが、下宿人のドーランという男性によって、ポリーの純潔がうばわれたことに気づく。そして夫人はドーランに怒りを感じ、娘と結婚するように交渉する。ドーランとは世間体やポリーの家族との関係に悩みながらも、結婚を承諾することを示唆する文章で物語は終わる。

“A Mother”

カーニー夫人はエーラ・アブー協会のホロハン氏の以来で、娘をこの協会の音楽会にピアノ伴奏者として参加させる。しかし実際に音楽祭が始まると、参加者も少なく協会との資金の不一致や齟齬が次々と起こってしまう。

▷三つの物語において表現される「麻痺」

“Eveline”からは過去の家庭での原体験から自分の意思を持たない主人公の様子

→家庭の存在が理由で、駆け落ちの際に躊躇してしまったイーヴリンの姿。

“The Boarding House,” “A Mother”では、主人公たちが自分の意思を持ちながらも外部の要因によって阻害される状態が「麻痺」として表現されていた。

→結婚や娘の大事において、自分の意思ではどうしようもできない出来事に対面する主人公たちの様子

背景

核家族世帯の流行していたダブリンでは、自分たちの家系を途絶えさせずに家族を形成したいという観念が強く、特に親と子の関係を強固にさせていた。

4 まとめ

階級、宗教、家庭を観点に、物語で表現される「麻痺」をそれぞれ具体的に考察した。それぞれから導いた、20世紀初頭に生きるダブリンの人々の「麻痺」状態を、ジョイスは物語を通して、アイルランドの市民に伝えたかったのである。

Joyce, James. *Dubliners*. Norton, 2006.

ジョイス、ジェームズ『ダブリンの市民』、結城英雄編訳、岩波書店、2004年。

二次資料

Ellmann, Richard. *Letters of James Joyce*. Faber and Faber, 1966.

Gifford, Don. *Joyce Annotated: Notes for Dubliners and A Portrait of the Artist as Young Man*. University of California Press, 1982.

Hogan, Robert, Richard Burnham, and Daniel P. Poteet. *The Rise of the Realists, 1910-1915*. Humanities Press, 1979.

Lane, Gary. *A Word Index to James Joyce's Dubliners*. Haskell, 1972.

Morgan, Jack. *Joyce's City: History, Politics, and Life in Dubliners*. University of Missouri Press, 2015.

Norris, Margot. *Suspicious Readings of Joyce's Dubliners*. University of Pennsylvania Press, 2003.

Spinks, Lee. *James Joyce: A Critical Guide*. Edinburgh University Press, 2009.

Yoshioka, Fumio. "Mr Duffy's Painful Case in *Dubliners*." *Studies in English Literature*, vol. 78, 2001, pp. 105-119.

梅津義宣「空白と麻痺—James Joyceの“A Little Cloud”(Dubliners)への考察」、『尚絅学院大学紀要』58巻(2009年)、15-24頁。

金井嘉彦「“queer”の裏側と『無関心な大衆』のパラドックス—ジョイスの『姉妹たち』再考」、『言語文化』51巻(2014年)、3-20頁。

金井嘉彦、吉川信編『ジョイスの罫—「ダブリナーズ」に嵌る方法』、言叢社、2016年。

金田法子『ジェームズ・ジョイス』、清水書院、2016年。

---『ジョイスの戦争—短篇集『ダブリンの市民』の作品「姉妹」「恩寵」にみる教会批判』、中央公論事業出版、2015年。

清水由文「19～20世紀におけるアイルランドの家族変動」、『桃山学院大学社会学論集』37巻(2004年)、53-90頁。

清水由文「20世紀初頭におけるアイルランド・ダブリン市の人口と家族構造」、『桃山学院大学社会学論集』46巻(2012年)、1-46頁。

鈴木良平『ジョイスの世界—モダニズム文学の解読』、彩流社、1986年。

波多野裕造『物語アイルランドの歴史—欧州連合に賭ける“妖精の国”』、中央

公論社、1994年。

結城英雄「ジョイス時代のダブリン(1)」、『法政大学文学部紀要』52巻（2006年）、19-32頁。